
幻想幻影譚（げんそうげんえいたん）

水上鈴（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

げんそうげんえいたん
幻想幻影譚

【Nコード】

N4023Y

【作者名】

みなかみれい
水上 鈴

【あらすじ】

作者が張り切りすぎて、荒ぶった小説。一年がかりで己のすべてをかけて書き上げた妄想と願望の産物。以前某誌で連載していたものを加筆修正して投稿しております。ご了承ください。血が、首が、腕が、足が、陰謀が、魔法が飛び交うカオスダークファンタジー。

第零夜 これがすべての始まり（前書き）

この小説は前置きも容赦もなく、血やら陰謀やらが飛び交います。
ご了承くださいまし。

第零夜 これがすべてのはじまり

それは、どこかの世界、いつかの時代。

科学の光が迷信、人ならざるものを駆逐する前の物語。

未だに人ならざるものが、人々が恐れおびえる闇に闊歩する時代の物語。

灰色の石畳が敷き詰められた広場のすみに

うら若い幼さのこる少女と呼ばれてもおかしくはない盲目の詩人が、
豎琴を片手に黒銀の毛並みの犬を傍らに物語を紡ぐ。

はしゃぐ子供の声を聞くと、詩人は近寄ってきた子供たちに微笑んだ。

いつのまにか集まったあどけない顔を期待に輝かせた子供たちに詩人は問うた。

「どんな物語がいいかしら？お姫様を助けた王子様のお話や、
小さな国を救った英雄のお話もあるよ」

「あのね、私はお姉ちゃんの小さい頃のお話がいいな」

「私の？それじゃあ、くわしくは秘密だけど、
それに近い物語を聴かせてあげましょうか」

詩人はひざに置いていた豎琴を持つ。

「ねーねーはやくう」

「せかしちゃだめだよ」

「楽しみだね」

子供らが口々に騒ぐが年長者と思しき女の子がおとなしくさせる。

「今はただ、目を閉じて聞いておくれ」

これは、淡く儂い小さな幻想^{ゆめ}。

これはとある一人の詩人が紡ぐ、真紅と漆黒に彩られた

どこかおぞましくも古めかしい、そして美しい物語。

さあさ、よってらっしゃい見てらっしゃい。

数多の歴史に埋もれて消えた、
とある男と執事の一代記の一部始終のはじまりはじまり。

もしもし、そのアナタ。

どうか、この物語を聞いてくださいますか？

第零夜 これがすべてのはじまり（後書き）

自分の好きなものを詰め込んだらこうなった。

第一夜 詩人が紡ぐ物語の世界（前書き）

好きなものと好きなものを混ぜるともつといいものができると思い込んでいた自分がだめだった。どうしてこうなったんだ。

第一夜 詩人が紡ぐ物語の世界

夜明けとともにその人は動き出す。

すべては親愛なる主一人のために。

漆黒の清潔なスーツに袖を通し、

絹を思わせる艶やかな腰まで届く藍色の髪をうなじで一つにまとめ、
ふちのないメガネをかけてほかの使用人を起こしにかかる。

「サーシャ、アリサ、マルコシアス、

セエレ起きてよ。もう時間だよ」

透き通る男か女かもわからない中性的な声で相部屋の住人を起こす。
「もう起きています桜花師匠」

すでに起床し、

身支度をすませた十代半ばの毛先をまつすぐにきりそろえた黒髪の
少女は

無表情かつ抑揚のない声で挨拶する。

瞳は濃い色のサングラスで隠され、表情を読み取りにくくしていた。

「おはようございます。どうも朝は弱くて・・・じゃないでしょう！
う！」

わたくしたち意外いないからといってもこの名前で呼ぶなと口をす
っぱく・・・」

カラスの濡れ羽色の毛先を切りそろえた

十代はじめの鮮やかな董色の瞳の少女が朝早くから説教する。

「あー、はいはい。それは聞き飽きたから」

耳をふさぎ、

藍色の髪をした桜花と呼ばれたスーツの彼女はふらりと出て行って
しまった。

「あのきまぐれっぷりにはおどろきます。

つきあわされるこちらのきもちにもなつてほしいです」

窓際には十代後半から二十代前半のこがらな紺色のショートヘアの

青年が

やれやれとばかりにてぶりを交えたため息をつく。

「その話はなしにしましょうセエレ。」

あの自由が服を着ているにいてる桜花の誘いにのった自分たちがバカみたいですが、

これも一興かもしれません。それより、今は一介の使用人なのでそれから」

こうして一日が始まる。

こうなってしまった理由は、

人ならざる者たちである者らが退屈しのぎにと人のふりをして

一介の使用人としてどこか剣と魔法の世界で働いてみようと考えにのってしまったからであつた。

働き始めて早くも数年。

今使えている主がとても気に入つたのでこのまま原炊き続けることにしたのであつた。

第二夜 詩人が紡ぐ物語の世界

さきほど、桜花と呼ばれた彼女は子供っぽいしぐさや表情から一変し大人っぽく恭しく丁寧にドアをノックし反応がないことを確認し、音を立てずに開ける。

「坊ちゃん、朝です。朝食をお持ちいたしました」

この館の主であり、所有者アルフォード家当主ジャン・マリス・アルフォードを起こすことから執事の一日は始まる。

「ん？・・・ああ桔梗か。昨日は遅くまで読書していたから。もうこんな時間なのか」

「そうです。本日の予定は午前はダンスレッスン、午後からは孤児院の寄付と訪問です」

無言で寝ぼけたまま黙々と食べ進める。

食べ終われば地味なベージュのスーツに着替えて楽器が置かれたダンスレッスンの部屋に行く。数メートル歩いたところで当主の証の指輪とアクセサリーを身につけに戻った。

戻り、たどり着くまでに桔梗はぼんやりと己らの主について考え事をしていた。

淡いプラチナブロンドをのばさず右側の一房のみのぼし、青いビーズのようなアクセサリーをつけている。

背丈は小柄なほうでもう18なのに16やそれ以下に見える童顔。かわいらしく純粋な普段の表の顔と仕事時の慇懃だが

冷徹な笑顔とそうでない笑顔を使い分ける大人な裏の顔を持つ。

やり手で切れ者と評されるが、アイカシア王国を守る12地方の諸侯の末席であるが故に蔑ろにされることが多い。

そんなことにもめげずにやっていく主の背中が桔梗には眩しかった。

「さあ、本日はこのアルフォード家主催のパーティですから、張り切ってくださいませう。」

アリシア、パトリシア、ガイア、アーク」

「張り切っていますね桔梗」

早朝にはサーシャと呼ばれていたメイドは、
のんきに笑ってみせるが本来の仕事以上の仕事量に疲弊しきっていた。

桔梗こと、桜花以外の使用人たちは

この屋敷で働くことになってから決めた偽名で呼び合うもいまだになれず、

苦労と心労と胃痛の連続の繰り返し。

とくに仲間内で

「自由奔放と悪意ない害意と無邪気な残酷さと知識と戦略に長けた軍師を混ぜたものが服を着ている」と評される桜花は頭痛の種でもあった。

それでも持ち前の頭のよさで幾度となく窮地を救ってくれたことは感謝していた。

が、それもケースバイケース。

いまは皆苦労の原因をつくるなと祈るばかりだった。

第三夜 詩人が紡ぐ物語の世界（前書き）

ささやかな疑問は何事にもつきものです。タブンネ

第三夜 詩人が紡ぐ物語の世界

「なぜ私がパトリシアなのでしょうか？」

アリサと呼ばれたメイドは一見涼やかな声で問う。

予定が山積みため、いつもの数倍の仕事量をなんなくこなしているようだ、

疲れがでたのかやや顔が青ざめている。

「アーク（箱舟）なんてネーミングセンスのカケラもない名前ですよ。そっちのほうがマシです」

早朝にはセイレと呼ばれたコックがぼやくが、それを黙殺する。

やがて本来の持ち場の仕事に取り掛かるうとして、

井戸端会議に花を咲かせていたが別々の方向へスタスタと行ってしまうた。

「どうしてガイアなのかよくわかりませんよ。まったく、あの人の思考はわかりませんねえ」

早朝ではマルコシアスとよばれた庭師が痛んだ花を摘み取り、刈り取った植物を焼却処分した。

一通り仕事を終わらせて、自らの両耳横の胸の上まで伸びたふた房の髪の毛を撫で付ける。

目の高さの部分には瑪瑙製の九つの目が描かれた円筒形のビーズが二つ。

いつものところに作られたのか、なんのためのものなのかわからないが唯一己が命を欠けてでも守り通すと決めた者からのささやかな贈り物。

後に腐れ縁の知人から聞いた話によればそのビーズは『ジービーズ』とよばれるものだとは判明した。が、深くは詮索しないことにした。贈り物は贈り物。それで十分だと結論付けた。

「煙が目にしみます」

煙が立ち上る蒼穹を見上げた。

澄み渡る空が高く、気持ちのいい風が吹いていた。

こんな風が吹く日はいい日になると語る友人を思い出して笑みがこぼれた。

この良き日をさらによくするために自分たちはいるのかもしれない
と思いながら、

頼まれていた仕事に取り掛かるべく小走りで屋敷の中に入った。

第四夜 重なる物語と詩人が生きる世界

一方、屋敷の大きさの割りに少ない使用人のために執事の桔梗は招待客のリストの照合から、

食材の吟味、会場のホールのセッティングすべてをひとりでこなした。

すべてが終わる頃には夕日が翳り、二頭だての馬車で主が帰ってきた。

「おかえりなさいませ」

「子供たちが意外と元気だね」

頬が紅潮し、楽しそうに語る主を見て目を眇め微笑む。

こうして、夜もふけて夜会が開かれた。

この日のためにと呼び寄せた最高の楽団、

仕事の話やゴマすりが見え隠れする紳士の悲喜こもこも、

流行のドレスを身にまとう令嬢や貴婦人、

色鮮やかで食指が動くような食事、気配りの行き届いた使用人、

華やかで心を奪う歌姫の歌声。

すべてが完璧にそろった夜会だった。

一度、詩人は豎琴を置いた。

「今日はもうお帰り。お母さんやお父さんが迎えに来たよ」
ちらほらと子供らの親が迎えにきた。

「もう、暗いもんね。じゃあねお姉ちゃん」

「じゃあね」

にぎやかな集団が去り、夜の帳が下ろされる直前。

「さあ、行きましょうかマルコシアス」

傍らの黒い犬が立ち上がり、先導する。

赤い夕日の照らす道の向こうから小さな子供の足音がした。

「お姉ちゃん、うちに泊まっていつてよ。何も無いけど」

小さな子供をおとなしくさせた年長の子供が戻り、詩人に声をかけた。

「いいの？」

「うん」

「それでは泊まらせてもらいましょう」

こうして詩人は相棒の犬とともに子供の家に言った。

その子供の家は一般的な中産階級に属する家で裕福ともいえないが、貧しいとも言いがたい家だった。

詩人は一宿一飯の恩にと歌を歌った。

櫨の木のにすに深く腰掛け、

身の回りの一切を詰め込んだかばんを足元において豎琴を手取る。

そして、深く息を吸い込むと歌を紡ぎだした。

夕方に中断した歌物語の続きを。

第五夜 詩人の旅路

詩人が紡いだのは華やかさはないが、あたたかみのある歌だった。歌は大変喜ばれ、その日は子供の部屋で寝た。

寝る前、子供は詩人にいくつか質問をした。

「お姉ちゃんの名前はなあに？」

「私の名前はジュエルっていうの」

「私の名前はねりビエラ。みんなりビーって呼ぶの」

ほかに、ジュエルがどれくらい見えるのか、

どこからきたのか、りビーは次々と質問攻めにした。

質問に答えているうちにりビーは眠りに落ちてしまった。

いつも傍らにある犬とりビーにおやすみを言ってから詩人もまた眠りについた。

朝が来て、朝食をとってからジュエルは旅立った。

りビーは名残惜しそうにぐずるが、母親が何事かを言い聞かせて別れを告げさせた。

詩人はやさしく相棒の頭をなでて歩き出した。

ゆっくりと歩きながら歌を口ずさむ。

やがて人気のないところで豎琴のある弦を

かき鳴らすと一人と一匹の姿が消えた。

ジャンはいつもとかわらない退屈させるような日常が待っていることを信じて眠りについた。

これがすべてのはじまりで、

これから波乱に満ち溢れたいくつさせない非日常が待っているとは疑いもしなかった。

嗚呼、運命の齒車はどこで壊れ始めたのだろうか。或いはすでに壊れていたのだろうか。
そうだとしたら、いったいだれがそうなるように仕組んだのだろうか。
すべては箱の中の猫と同義である。

第一章「これで時計の針は動き出す」 完結

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」（前

ここからが作者の通常営業です。

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」

穢れなき白が大地を覆い尽くす季節に無味乾燥な灰色の石畳の街道を一台の箱馬車が通過する。通過する間も音もなく降り積もるそれが馬のひづめの鳴らす音を掻き消す。静寂に包まれた鉛色の空に興味を持たないのか御者は遙か前方だけを見据える。時折、吹きさらば風が駆け抜けていくと同時に粉雪を舞い上げて視界の妨げとなる。ほんのりとあたたかみのある馬車内で手持ち無沙汰で物憂げに窓の外を見やる青年と少年の間の人がこの国のことを考える。

「隣国とこの国の間には巨大な山脈があるからまだいいけど、最近やたらと好戦的になってきた。あと、海賊の略奪行為も頭が痛いし、

・・・」

頭を抱えて悩む人物は馬車の主にしてアイカシア王国の大貴族の末席に名を連ねる、アルフォード公爵家当主ジャン・マリス・アルフォード。一族があまりいなく必然的に当主となった彼は今、政治について悩んでいた。外患内憂とはこのことで非常に危うい均衡の下に成り立っている平和とこの国を憂いていた。この状況を打開せねばと意気込んでいた青いときは過ぎたとつぶやく。そう嘯いてみても意味はないとわかりきっていてもしてしまう。国中が雪に閉ざされるこの季節に国王と十二の地方の管理を任された地方公爵たちの会議のために国王の直轄領である天領にある辺境の館、「星藍玉館」せいらんぎょくかんに赴くところだったのを思い出した。はるか南方でしかとれない、この国では星藍玉と呼ぶ瑠璃をふんだんに装飾に使った屋敷だからそついう名前がついたのだ。みな一様に「館」と呼ぶが、ある種の複合施設と称したほうがわかりやすい。本館が一つの城以上に大きい。本館とは別に会議中に地方公が宿泊するコテージ風の離れが12ある。みな同じつくりで同じ規模なのはある意味で平等で無意味。本館には宿泊しないにもかかわらず各人の部屋まで用意されている。

無駄に部屋数が多すぎて活用されていない部屋や階は膨大にあり、無駄で散財のもとだと考えるものも少なくない。維持費や人件費も馬鹿にならないため、払い下げて孤児院にする案が通り、年が明けてすぐに孤児院として運営されるので使用は今月いっぱいまでとされている。近年戦争が続く、どこも孤児院は孤児たちであふれ苦しい経営状態が続くのでちょうどいいという意見が大多数だった。取り壊すのも惜しいし、博物館にしようとしても首都からは遠すぎるし、維持費を浮かせて軍備に充てたいというのが本音であった。だが、買い取りたいという酔狂な御仁が存在すればと仮定してのことだ。それ以上を議論しても詮無き事だと判断して窓の外を眺めた。

第六夜 「星藍玉館連続殺人事件（セイランギョクカンサツジンジケン）」（後

初期よりかなり書き足しました。初期設定では屋敷の名前なんてありませんでしたし。もうちょっと文章を足してもいいかも。

第七夜 詩人が紡ぐ物語の世界（前書き）

この物語にはふたつの世界が存在します。ひとつはジャン・マリス・アルフォードを主軸とする物語。もうひとつは詩人の少女と犬が渡り歩く世界。どちらかが欠けていればなかったことになる。

第七夜 詩人が紡ぐ物語の世界

視界の端に灰色の何かが動くのを捕らえた。けたたましい獣の咆哮が複数聞こえた。

「あれは・・・灰色狼と・・・氷雪の魔狼フェンリル！

しかもかなりの大群で！普通は群れないのに」

灰色狼は灰色なだけの普通の狼だがまれに生育環境の影響で大きく育つ個体もある。あまり群れで行動はしないが繁殖期および子育ての時期は群れで行動する。フェンリルは氷の精霊の上位種で体調は優に2メートルを超える。気性の荒さと戦闘能力の高さで畏れられる。また、氷の精霊の下位種である氷の乙女フラウがいる。とつさに魔術の発動補助媒体である杖を右の太ももについたベルトからはずす。

携帯用につくられた50センチ程度の先端に直径10センチの水晶玉がついた青い金属製の杖を持ち、構える。もしものときにと執事に懇願されて血を吐く思いをして習得した魔法で撃退しようとしたが、その必要はなかった。風がやんだ瞬間、ヒュッと風を切る音がして三匹の灰色狼が同時に倒れ真紅の花を咲かせる。灰色狼を斬り捨てた彼の目前で立ち止まり、構える。彼の信頼する執事、桔梗が刀で斬ったことがすぐさま理解できた。彼女は返り血を浴びてわらっていた。何度も切り結び、斬り帰す。フェンリルは一刀両断されるとガラス細工のように脆くも儚く砕け散る。その光景は凄惨で血にまみれているがどこか危うい美しさを感じさせた。剣戟をジャンはどれも狙ったように頸動脈をきれいに切断していた。正確さと緻密さにくわえ技術がないとできない芸当だと感心した。万が一に備え杖は持ったままにした。ダンスにも似たステップで最後の一頭を倒した。終了したことを丹念に確認してから馬車から飛び出す。被害もさほどなくて、強いてあげれば馬車と桔梗の服が汚れてしまっ

たていどだ。

道中は比較的平穩だったといえよう。交通の要の街道だとキャラバンを襲う盗賊が絶えない。魔物のほうがマシだと語るものがある。一番恐ろしいのは生きている人間だと豪語する輩だっている。

それを実感しているので頷ける。王国に12人いる地方公は数字が大きければ大きいほど首都や天領から遠ざかる。一番近い第一公は半日程度で済むが、第十二公たる自分だと十日はかるくかかってしまったため何かと出費がかさむ。だが、次回からは多少軽減されると予想できた。しばらくして、馬車や服の汚れをふき取ると何事もなかったかのように走り出した。走り出す前に桔梗はこっそり狼の毛皮を剥ぎ取っていたのをジャンはしらなかった。殺風景な街道を通り抜け、魑魅魍魎が跋扈する森を抜け、満天の星空が瞬く中、十日間のたびを終えた。体感時間は数倍以上、帰りのことを思いやるとさらに疲労感が増したのはここに綴るまでもない。

第七夜 詩人が紡ぐ物語の世界（後書き）

ここは書き加えなくてもいいと判断したため原文ママです。

第八夜 詩人の旅路

黒銀の毛並みを持つ犬を連れ歩く十代半ばの少女の詩人が寂れた路地で歌を紡ぎだす。それはありきたりな身分差故の禁断の恋物語。題材が平凡だからこそ詩人の技能が試されるとされるその歌を紡ぐ唇は流浪の詩人とは思えないほど手入れされ、つややかで瑞々しい。少女が歌うと儚くも切ない独特の節が歌に追加され、不思議な余韻にわずかしいない聴衆が酔いしれる。詩人は人々の喜捨により食いつないできた、そしてこれからもだろうとどこかさびしげに語る。ある日の昼過ぎに大通りから少し離れたところで歌っていると、隠してはいるつもり身なりのかなりい男に話しかけられた。その男は初老寸前で髪の毛に白いものが混じり始めていた。相棒の犬が男の顔を覗こうとするものの帽子を目深にかぶり顔はわからない。

「何でしょうか？」

「すまんが、我が屋敷に来てもらいたい」

「ご用件は？」

詩人が立ち上がり身構え、犬は主人に害をなす者かと思つて唸る。

「我が孫娘の誕生日会で楽師を呼ぼうと思つてな。明日の夕刻この通りの突き当たりの屋敷に来るがいい。これがあれば入れるだろうな」

おもむろに紋章入りの金のバッジが投げ渡される。犬が飛んでキャツチして着地する頃には停泊していた馬車が走り出し、男はどこにもいなかった。犬がバッジを詩人に渡してそれを受け取ると黙ったままそつと頭をなでて抱きしめた。犬はうれしそうに甘え、しつぱをふって喜びを表す。しばらく考えた後に詩人は紋章をなぞり形を覚えてから生成り色の肩掛けかばんにしまい、立ち上がって歩き出した。犬はいつも目の不自由な主人を気遣い、主人の詩人は犬を労わり、そばにいてくれることに感謝する。

当たり前のように難しいこの関係は強固な絆の上に成立していた。

第九夜 詩人が紡ぐ物語の世界

辺境の館へたどり着くとどおじに雪は霰混じりに変わった。濃色の暗雲がたちこめ、眺めた者の気分を暗くした。ほかの馬車に目をやると見慣れた紋章のついた見慣れない装飾がつけられた馬車とまっていた。桔梗の心が気につけたが、忙しいあまりにその考えを意識外へと追いやった。桔梗以下の使用人は主や自分たちの荷物を滞在する予定の離れに運び込むことに、ジャンは今年の議題について頭がいっぱいだったので馬車のことには誰も考えず、その場を離れた。離れの館についてからまず実行したことは掃除だった。月に一度住み込みの使用人が掃除するとはいえ、かなりほこりっぽくゆるい戸を開けて掃除する必要があった。寒風に身を縮ませながら3時間ほどですませた。

「まさか、ミカンと玉奈^{たまな}以外の全員ついてくるとはねえ。ボクはてつきりサーシャあたりは残ると思ってたよ。若作りはもうやめたら？もう若くはないんだし」

「肉体年齢は若いから若作りではありません。それに、ミカンさんは愛娘の玉奈ちゃんに心配だから残りました。それに桜花、貴女はもはや義務です。それくらい自覚してください」

使用人室で和気藹々と話していたつもりだったのだが、桔梗こと、桜花がサーシャと呼んだ鮮やかな董色の瞳のまっすぐな長い黒髪の十代はじめのメイドの逆鱗にふれたことから言い合いと発展してしまった。その言い合いはじゃれあい程度の意味しかなさず、必然的になかったことになった。事あるごとに他人をからかい、遊ぶ桜花の姿勢にあきれてしまったほかのメンバー。あの気まぐれで自由奔放な性格だから仕方がないと皆一様に口をそろえる。

「夕食は向こうでとるみたいだから当分楽できるんじゃない？」
どこからか持ち込んだワインに舌鼓を打つ桜花をよそに、ほかの使

用人は各自思い思いに少し早い夕食を取ったり、読書にいそしんでいた。檜の木の机に折りたたみ式のチェスセットを展開する。

ルールに則りながらも無秩序に無差別に、時には無意味な駒をとったりしながらゲームを進める一人遊びをしている桜花はゲームも半ばで切り上げてセットを仕舞い、窓の外を眺める。外は霰交じりの雪から完全な雪へと変貌を遂げ、風が雪を地面へとたたきつけるような猛吹雪になった。

「酷くなってきましたね。帰りに支障をきたさないといいのですが」色の濃いサングラスをつけた十代半ばの日本人形のような無表情のメイドアリサは左腕に留まらせた下僕のかなり大きいカラスの健康状態をチェックしてすぐにそう告げた。

「離れて本館をぐるりと囲むようにできてるから、異常があってもすぐ駆けつけられるからいいよね。距離も平等だし」

樂觀的な事とまかない口にする桜花を見て、サーシャは深いため息をついた。

「無事にすごすことができればよいのですが・・・」心配性なサーシャは不安そうに言った。

窓の外は暗雲が垂れ込め、不穏な自体を予言するようだった。

第十夜 詩人が紡ぐ物語の世界

アイカシア王国の恒例行事、地方の筆頭貴族と国王による報告会もかねた会議。それぞれの地方の特産品の出来具合、税収、人の流入、内政についてが大半の議題をしめている。稀にだが、政略結婚や婚約者決めなどがある程度で非常に殺伐と無味乾燥なことばかりなのは否定できない。紋切り型な答えと、予想通りのありきたりな議題に瑣末事ばかりがのぼるこの会議は退屈を通り越し、苦痛と拷問でしかないと感じる十三の席の末席の少年であり国の政治の一部を担う第十二公ジャン・マリス・アルフォードは自分や領民にとって有益になりうることを羊皮紙に書き取っていた。発言権は王都に近く、権力のある第六公までがほとんどを占める。末席の自分など数合わせ程度の意味しかないのは重々承知しているの行動だった。お誕生席に座る、話し合っても無為且つ不毛な話題について議論していてもいやな顔はせず、不適にふてぶてしく笑う国王をごく一瞬わずかに見てまた書き取り作業に戻った。アイカシア王国では国王の存命中及び、在位中は名前を公表されない。生存中は通り名で呼称される。死後、国葬の時の一度のみ公表される。国民も貴賤きせんに関らず、生存中には通り名で通し、死後本名が公表される。これは呪いなどから身を守ることから派生していて、建国時から今も連綿と続く風習として残っている。今代の陛下はショートヘアでこげ茶のツンツンした外側に跳ねたクセ毛を持つ青灰色の瞳の不良っぽいイケメンの青年。国王はジャンを見て不敵に笑った。ジャンが再度情報収集のため緒公を眺める。ふと、向かいの第十公の席に座る見覚えのない少女と一瞬だけ目が合った。漆黒のベリーショートの蒼い瞳の少女は膝丈の黒いゴスロリドレスに身を包みピンクの八重咲きの椿を三輪頭につけていた。こちらに気がついた彼女はにこりとほほえんでこういった。

「わたくし、父の名代で参りましたの」

「なるほど。通りで・・・」

「ええ、また機会があればよろしくと父が話しておりました」

「こちらこそとお伝えください」

小声でほんの少しだけ会話が続いた。会話が終了してからジャンが辺りを見回すと第四公の席が空いていたが誰も気にしていない様子だった。否、己が抱える問題にしか頭にないのだろう。第三公は病弱で影が薄い中年直前の青年で有名。彼は発言できず、オロオロしていた。壁の時計の針が七をさしたとき、会議開始から三時間ほどで遅い夕食も含めた二時間ほどの休憩をとることになった。第三公と、上品な老婦人の第八公が化粧直しを理由に会議室である食堂を退出。二十分ほどで第八公は戻ってきたが、第三公は戻ってこなかった。アリバイとして『男性と女性の化粧室がかなり離れているため、どこに行ったかは知らない』と第八公は証言した。ここでやっと誰かが第四公が不在であることに気がついた。料理が運ばれると騒ぎがなかったように無言で誰もが席に着いた。食事中は雑談の類もなくただ沈黙がその場に横たわった。ジャンは王室専属料理人の料理を堪能しつつも頭の中で状況整理をかかさなかった。

第十一夜 詩人が紡ぐ物語の世界

だれもが事態の異常さに気がついていても事態を改善させるべく、話そうとはしなかった。食事が終わり、行方を尋ねたのは国王だった。

「おい、第三公はどこに行っただ？知らないか」

その一言から雰囲気は豹変した。

一人ずつ答えるも結局はてがかりはつかめずじまい。下男や下女らに搜索を言いつけようとする年長者の第一公の言を制して国王が驚くようなことを言った。

「今から探しに行かないか？」

年嵩の者が動揺した。何かと理由をつけてこの場に残ろうとするものを説き伏せ、探索隊が結成された。自由奔放、かなり行動的で子供と同じくらいの好奇心を持つ王を誰も止められなかった。妙なところで子供っぽい腹黒い彼を實のところ苦手とするものは多い。

だがジャンはそんな国王を好いていた。新しい風をもたらし、よい潮流を生み出すものになると確信していたし、なによりもきさくで豪放磊落なその性格に好感をもてたからだ。だが、いたずら好きで部分はどうにかしてほしいと考えているのも事実。幾度もいたずらに困らされ、気苦労を山ほどこしらえた苦い記憶はある点に目をつぶればとこっそりと愚痴をこぼしながら言う。こうして、半ば引きずられるように会議室兼食堂を後にした。

第十一夜 詩人が紡ぐ物語の世界（後書き）

ここは中途半端に区切るんじゃないかった。

第十二夜

しゃれた真鍮のランプを一人一つずつ携帯する。いつのまにか吹雪は降り止んだが、風向きの関係で正面玄関は吹雪で閉ざされ、何者かによって裏口も外側から塞がれ閉ざされてしまった。天井の頼りなさげなシャンデリアの照明だけでは心細く、ランプがあることで幾分か不安が取り除かれた。異様なほどに歩くものたちの口数は少なく、必要最低限にとどまった。隊列は王が先陣を切り、以下序列順に歩きジャンが最後尾。しばらく歩くと少し話をした第十公の席に座っていた少女に声をかけられた。

「怖いですね。こんな時間に出歩くのは初めてです。えっと・・・あ、自己紹介がまだでしたね。病気の父の名代で来ました。マルグリット・ジュリア・ゴーチエです」

「僕はジャン・マリス・アルフォード。今後ともよろしくね。こんな時間まで起きていたことは数えるくらい少ないよ。ちょっと眠いかな」

小さな声でささやかな交流をしている時に先頭集団がかすかな変化に顔をしかめた。だんだんと歩く速度がゆっくりからやや早足に、そして最終的に疾走した。属特有の臭気があたりに漂い始める。今までの凍てついた冬の空気とは違う生ぬるい空気が鉄のにおいを運ぶ。その正体がおびただしい量の血だとだれもが確信し、根源の部屋扉を王が開けた。

第十二夜（後書き）

マルグリット・ジュリア・ゴーチエは「椿姫」がモデルです。名前だけ。今回はそんなにいじらず、語尾の修正程度です。

第十三夜 グロテスク描写に注意（前書き）

作者の本気がこれです。かっとなってやった。後悔などしていない。

第十三夜　グロテスク描写に注意

王が手荒く扉を開け放つと、真冬特有の体の芯まで凍える空気が部屋唯一の窓の隙間から流れ込む。窓を背に、細身の優男がいすに座っていた。よく見ると右腕が引きちぎられているように見えた。後の司法解剖の報告書には、引きちぎられているのは服のみで腕のほうには丁寧に刃物で切断されていたと記録係の後の憲兵らは記述する。死体は服装から第四公と推定された。あまりのことに呆然としていると絹を数枚重ねて引き裂いたような甲高い悲鳴が聞こえた。悲鳴の大きさからしてあまり離れていないのだらう。彼らはすぐに走ってむかった。あまり運動をしたことがないのだらうか。体力のない第八公と第六公は追いつけずにはぐれてしまった。そんなことにも気がつかず、のこのりメンバーは駆けつけた。ある一室の扉が開いていて、中にはジャンのつれてきたメイドたち以外の下男下女らほぼ全員が無残な死体で倒れていた。唯一生き残ったメイドがいた先を目で追うと、惨劇の場だとわかり、驚愕のあまり動けなかった。青白い幸薄そうな顔をした頭のみがベッドに鎮座しており、開け放したオーク材のクローゼットの中から右腕が無造作に入れられ、サイドテーブルの上の部屋には不釣り合いな大きな花瓶には両足と左腕が手のひらと足の裏を上にしていけられていた。左腕には黒いバラが握られていて、中には水の代わりに血で満たされた。花瓶の下にはシンプルな便箋が置かれていた。床一面に血がまかれてむせ返る強烈なおおいに一時退散し、死因などを調べた。顔から第三公だと判明した。国王はこっそり便箋を手に取り、懐に収めたのをはつきりとジャンは見た。あまりにも精神衛生上よろしくない風景なので最低限調べられてから厳重に封印された。一度戻って状況整理だと王が告げると素直に従うことにして、不安と恐怖が入り混じった複雑な感情を漂わせながら歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4023y/>

幻想幻影譚（げんそうげんえいたん）

2011年12月19日10時55分発行